様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００３８２

研究課題名（和文）日系アメリカ人三世が描く「強制収容」物語

研究課題名（英文）Internment Camp Stories by Japanese American Sansei Writers

研究代表者
佐藤　清人（Sato, Kiyoto）

山形大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：８０１７８７２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　日系アメリカ人二世の作家は太平洋戦争と強制収容所に関する自らの体験を基に「強制収容」の物語を書いた。一方、戦後生まれで、戦争体験のない三世の作家はどのようにして「強制収容」の物語を描いたのか。本研究は4人の日系アメリカ人三世の作品を分析し、そうした問題に答える試みである。三世作家の「強制収容」物語の内容は、基本的に二世作家の物語の繰り返し、もしくは模倣であり、新鮮味は少ない。しかし、三世作家は語りに斬新な手法を導入し、人種差別の問題を日系人固有の問題からより一般的な問題に敷衍し、ミステリーによって読者を拡大するなど、二世作家の「強制収容」物語を発展させていることを本研究は解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は日系アメリカ人三世の作家が一世や二世の作家による「強制収容」物語を単に繰り返したのではなく、より発展させたことを明らかにした。同じ「強制収容」物語であっても、世代によってアプローチの方法は異なっているのである。世代の相違に着目する日系アメリカ文学の研究がこれまでなかったわけではないが、本研究はそうした視点の重要性をより鮮明にした。とりわけ、強制収容における人種差別の問題について、これまでは日系アメリカ人固有の問題と見なされることが多かったが、Cynthia Kadohataはそうした問題をアメリカのより一般的な人種差別の問題に引き上げることに成功したことを本研究は明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Japanese American Issei (first generation) and Nisei (second generation) writers wrote their writings on the basis of their experiences during the period of the Pacific War. How Sansei (third generation) writers, on the other hand, who were mostly born after World War II, have created their novels? My study is to answer the question by analyzing the novels of four Japanese American Sansei novelists. Julie Otsuka wrote her novels imitating her predecessors but employing new narrative devices. Cynthia Kadohata not only describes anti-Japanese feelings but also mentions racial discrimination in America in general. Naomi Hirahara and Dale Furutani have written many novels of mystery that is one of the most popular literary forms. Through mysteries, they must have introduced the history of Japanese Americans to more and more readers. Thus, Japanese American Sansei writers are successful in developing internment stories by Nisei.

研究分野：英米文学

キーワード：日系アメリカ人　強制収容　Julie Otsuka　Cynthia Kadohata　ミステリー小説　Dale Furutani　Naomi Hirahara

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日系アメリカ人の歴史において、１９世紀後半移民初期の時代における「写真花嫁」と第二次世界大戦時における「強制収容」は悲劇的な出来事として知られる。初期のアメリカへの日本人移民は男性がほとんどであった。異人種間結婚が一般に認められなかった当時のアメリカにおいて、日本人男性は日本に住む女性と直接面会することなく、写真や履歴書の交換だけで結婚を決める者が多かった。そのようにしてアメリカに渡った日本人女性は「写真花嫁」と呼ばれた。男性の見合いの写真が何十年も前の写真であったり、まったく別人のものであったことから、多くの混乱と悲劇が生まれた。「写真花嫁」は悲劇の代名詞となった。一方、太平洋戦争で日本がアメリカと戦争を始めた時代には、約１２万人の日系アメリカ人が強制的に収容所に入れられ、自由を奪われることとなった。「強制収容」はすべての日系アメリカ人に共通な悲劇であった。

日系アメリカ人一世と二世の作家は、こうした日系アメリカ人の苦難に満ちた体験をそのまま自叙伝として著す一方、その経験に基づく小説も書いた。また、直接作品のテーマとして取り上げることはなくても、彼らの著作物のいたるところにこうした出来事への言及が散見される。

ところで、２０世紀の終わりから２１世紀にかけて、日系アメリカ文学の担い手が二世から三世に移っても、日系アメリカ人の描く作品の内容はさほど変わってはいないように見える。三世の作家は「強制収容」を実際に経験していないにもかかわらず、やはり彼らの作品には「強制収容」への言及が多く見られ、それをテーマとする作品も後を絶たない。三世の作家はなぜ「強制収容」の物語を書き続けるのか。また、そこに二世作家とは異なる新たな創意工夫があるとすればそれは何か。これまでに三世作家の「強制収容」の物語と小説が文学研究の俎上に登らなかったわけではないが、一世や二世の作家との相違という観点から三世作家の作品が分析、読解されることはなかった。本研究はこうした視点に立って、日系アメリカ人三世の描く「強制収容」物語の分析を試みるものである。

２．研究の目的

前項に記述したように、すでに二世作家による「強制収容」の物語が多数書かれているにもかかわらず、戦後生まれで「強制収容」の経験を持たない日系アメリカ人三世の作家が今もなお「強制収容」の物語を書き続けている。三世の作家による「強制収容」物語は単に二世作家による物語の繰り返し、二番煎じに過ぎないのか、あるいは、新たな「強制収容」物語の誕生なのか。本研究の目的はこうした問いに答えることである。

３．研究の方法

本研究を遂行するに当たり、具体的に日系アメリカ人三世の作家４名の作品を取り上げ、読解と分析を行う。最初に取り上げるのは Julie Otsuka の *When the Emperor Was Divine* と *The Buddha in the Attic* である。Otsuka の作品は語りの手法に特徴がある。したがって、その語りの技法を中心に作品分析を行う。２番目に取り上げるのは Cynthia Kadohata の *Weedflower* である。Kadohata の作品を分析するに当たっては、日系アメリカ人二世作家 Yoshiko Uchida の *Journey to Topaz* との比較を行う。両者はともに１０代前半の少女を主人公とする物語であり、両者を比較することによって、Kadohata の作品を解明するとともに、Uchida の作品にも光を逆照射し、その本質の一端を明らかにすることができる。最後に取り上げるのは Dale Furutani と Naomi Hirahara のミステリー小説である。二世の作家は自伝や小説を書いたが、ミステリー小説を書くということはほとんどなかった。ミステリーを書いたというこの一点に着目しただけでも、三世作家による「強制収容」物語の新しさを見て取ることが可能だが、それがいかなるものか、両作家の作品を詳細に読解することによって解明する。

４．研究成果

令和 2 年から 4 年までの 3 年間の研究期間において、研究題目に関連する論文を以下の通り発表した。

令和 2 年度においては日系アメリカ人三世の小説家 Julie 0tsuka の作品分析を行い、その成果を「断片的な物語―Julie 0tsuka の小説―」というタイトルで 「人文社会科学部研究年報」

第 18 号(令和 3 年 3 月)に掲載した。この論文では、Julie Otsuka の 2 つの作品 *When the Emperor Was Divine* と *The Buddha in the Attic* を取り上げた。前者の物語で Otsuka は、太平洋戦争中に強制収容されたある日系アメリカ人家族の姿を描き、後者では、日系アメリカ人一世の女性、「写真花嫁」という呼び名で知られる女性たちが米国に渡り、家族を成し、やがて強制収容されていく姿を描いている。これら 2 つの作品は、日系アメリカ人作家の描く物語の定番ともいうべき「写真花嫁」と「強制収容」をテーマとしているが、その物語の内容や展開には、新鮮味が乏しく、一世や二世の作家がこれまで語ってきた物語の繰り返しもしくは模倣でしかない。しかし、その語りの手法に目を転じると、内容の平凡さとは逆に極めて特異な手法が使われていることが分かる。作品が進むたびに物語の中心人物が変わったり、語り手が三人称から一人称に転じたり、合唱するかのように一人称複数で語ったりという具合に、風変わりな手法が使われている。しかし、こうした語りの手法は新奇ではあるが、必ずしも効果的に機能しているとは言い難く、物語の凡庸さを埋め合わせるほどの効果を発揮してはいない。Otsuka の作品は多数の言語に翻訳され、諸外国においては高評価を得ているが、日系アメリカ人の歴史や文学に通暁している読者にとっては若干物足りない作品となっている。この論文では、何故このような結果に至ったのか、その原因を探った。

令和 3 年度においては日系アメリカ人二世の作家 Yoshiko Uchida と三世の作家 Cynthia Kadohata の比較研究を行い、その成果を「*Journey to Topaz* と *Weedflower*―ヨシコ・ウチダとシンシア・カドハタの比較研究―」という論文にまとめ、「山形大学紀要（人文科学）第 20 巻第１号（令和 4 年 2 月）に掲載した。

Uchida と Kadohata の作品はともに 10 代前半の日系アメリカ人の少女を主人公として、彼女たちが強制収容されたときの体験を物語にしたものである。日系アメリカ人二世の Uchida は彼女自身強制収容を体験しているが、戦後生まれの三世である Kadohata は収容所の体験を持っていない。こうした違いが作品にどのように影響しているかを探ることがこの論文の目的である。

Uchida の *Journey to Topaz* は Yuki という少女を主人公とし、そこで語られる出来事の多くは Uchida 自身が収容所で経験した実際の出来事に基づいている。 Uchida はこの作品で太平洋戦争中に日系アメリカ人を強制収容したアメリカ政府の政策を非難する一方、アメリカ合衆国という国への信頼を失うことはない。また、日系アメリカ人のアメリカ合衆国に対する忠誠心をも語っている。この小説は Yuki 個人の物語というよりは日系アメリカ人の総体的な物語となっている。

一方、Kadohata の物語は Sumiko という個人を中心とした物語であり、また、彼女の心情の繊細な揺れ動きが作品のテーマのテーマとなっている。作品中 Sumiko にとって最も強烈な経験は、強制収容が行われる以前、白人のクラスメートの誕生会で味わった人種差別であった。しかし、Sumiko には Frank というネイティブ・アメリカンの友人が現れ、彼女は人種の問題を相対化するようになる。人種や民族の問題に対する Uchida の態度は文化多元主義と呼ばれるべきものである一方、Kadohata のそれは多文化主義であり、両者の相違は明らかである。

令和 4 年度においては二人の日系アメリカ人三世の作家、Dale Furutani と Naomi Hirahara のミステリー小説について、その作品の解説および分析を行い、その成果を「ミステリー小説と日系アメリカ人―*Death in Little Tokyo* と *Snakeskin Shamisen* を読む―」という論文にまとめ、「山形大学紀要（人文科学）第 20 巻第 2 号（令和 5 年 2 月）に掲載した。 Dale Furutani の *Death in Little Tokyo* は殺人事件をめぐるミステリー小説である。その事件は太平洋戦争時における日系アメリカ人の強制収容、とりわけ 忠誠登録をめぐって日系アメリカ人社会のなかに生じた対立が原因である。Hirahara の小説 *Snakeskin Shamisen* も同様に殺人事件をめぐるミステリー小説である。内容は複雑ながら、その殺人事件の原因はやはり日系アメリカ人の強制収容に遡り、さらにその前後の時代における日系アメリカ人と共産主義との関係が加わる。Furutani と Hirahara は、日系アメリカ人の歴史を紐解く手段としてミステリーの謎解きを利用した。彼らはミステリーという大衆的なジャンルを媒介として、日系アメリカ人の歴史をより多くの読者に知らしめたのである。

３年の研究期間において、本研究は日系アメリカ人三世の作家による「強制収容」物語の読解と分析を行った。物語の内容において、三世の作家は基本的に一世や二世の物語を踏襲したが、Julie Otsuka は語りの手法で新基軸を打ち出し、Cynthia Kadohata は人種差別の問題をより一般化し、また、Furutani と Hirahara はミステリーという新たなジャンルを開拓した。三世の作家は決して既存の「強制収容」物語を単純に繰り返したわけではなく、多方面に発展させた。本研究では、こうした発展の様相を詳細に分析、解明した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 佐藤清人	４．巻 20-1
２．論文標題 Journey to TopazとWeedflower-ヨシコ・ウチダとシンシア・カドハタの比較研究-	５．発行年 2022年
３．雑誌名 山形大学紀要（人文科学）	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤清人	４．巻 18
２．論文標題 断片的な物語 ―Julie Otsuka の小説―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山形大学人文社会科学部研究年報	６．最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤清人	４．巻 20-2info:doi/10.15022/00005640
２．論文標題 ミステリー小説と日系アメリカ人ーDeath in Little TokyoとSnakeskin Shamisenを読むー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山形大学紀要（人文科学）	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15022/00005640	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関